

II-1

経済学とは何を学ぶ学問か？

「経済学」とはどんな学問か——。経済に関連する学問だとは分かって、ズバっと答えることができる人は多くないでしょう。経済学を一言で言えば、消費、労働、価格の動きなど日常の経済活動を科学的なアプローチで分析し、法則性を見だし、最終的に経済を取り巻く様々な問題の解決につなげていこうというものです。

この章では、経済学の根幹をなす考え方や、経済学の2大分野である「マクロ経済」と「ミクロ経済」について学んでいきます。

「経済学」とは、社会全般の“経済活動”を研究の対象とする学問です。明確な定義があるわけではありませんが、広義で言えば「ヒト、モノ、カネの関わるものは全て経済学の研究対象」と言っていいたいでしょう。経済学の本では一般に、「社会の限られた資源をどう分配していくかを研究するもの」と定義しています。著名な経済学者は以下のように定義しています

経済学とは…

個人、企業、政府、さらに社会にあるその他のさまざまな組織が、どのように選択し、そうした選択によって社会の資源がどのように使われるかを研究する学問である。

——ジョセフ・E・スティグリッツ
『スティグリッツ入門経済学』(東洋経済新報社)

経済学とは…

社会がその希少な資源をいかに管理するのかを研究する学問である。ほとんどの社会では、資源配分は全権を握った1人の独裁者によって決められるのではなく、膨大な数の家計と企業の行動を統合した結果として決定されている。

——ニコラス・G・マンキュー
『マンキュー入門経済学』(東洋経済新報社)

経済学で扱う事象、例えば、人々の消費、インフレ・デフレ、金利の動きや為替レートなどは、人間が関わるため不確定な要素が極めて多く含まれます。こういった対象の中から法則性を見だし、モデル化してメカニズムを解明していこうというのが経済学の試みでもあります。

科学的な観点で「経済」を見ていくうえで、経済学は幾つかの前提や原理をベースにしています。

2001年にノーベル経済学賞を受賞した米国の経済学者、ジョセフ・E・スティグリッツ米コロンビア大学教授は、5つのキーワードを理解することが、経済学全体を理解する上で重要だと指摘しています。それは、「トレードオフ」「インセンティブ」「交換」「情報」「分配」の5つです。

ある一つのことに資源を使えば、他のものに使える資源は少なくなります。これがトレードオフの考え方です。インセンティブは、何かを判断、選択する際に各個人が反応し決定することを指します。何かを選択する際、交換ができればその範囲は拡大し、情報があれば賢い選択ができます。どんな職に就くのか、どんな教育を受けるのか、といった選択が、社会の富や所得の分配も決めます。選択という行為に付随するこれらの5つのキーワードの分析こそが経済学の仕事です。

一方、N・グレゴリー・マンキュー米ハーバード大学教授は「経済学の10大原理」を提示しています(図II-1-1を参照)。10の原理は大きく3つに分類できます。1つ目(第1～4原理)は「人々はどうのように意思決定をするか」。経済の動向は、個々人の行動を反映しています。その意思決